

翻刻 佐藤春夫家族書簡（一九一三～一九一七年）

河野龍也

一 春夫の文学修行時代

佐藤春夫（一八九二～一九六四）の文学的搖籃期については、本人の回想を除いて依拠すべき文献に乏しく、検証が難しい状態が続いていた。だが、最近では佐藤家に保管されていた資料の調査と公開が進み、部分的ながらデビュー

前の生活状況が明らかになりつつある。特に春夫・夏樹（一八九五～一九八七）・秋雄（一八九八～一九四二）の三兄弟の日記の発見は、この時期の解明には有力な文献の出現であったと言える。現在では、実践女子大学文芸資料研究所から、「佐藤春夫・夏樹・秋雄日記 影印版」（『別冊年報XV』二〇二二・三）が発行されており、日記の全貌をカラーで確認できるようになった。翻刻作業も進行中で、すでに春

夫日記と秋雄日記の一部については報告がある（拙稿「佐藤春夫関係日記翻刻（二）——明治三十七年春夫日記・大正元年秋雄日記」、『年報41』二〇二二・三、同所刊行）。今回新たに公開する家族書簡は、これらの日記とも密接に関連するため、最初に日記の概要を紹介し、当時の春夫一家の状況を把握しておくことにしたい。

春夫日記は一九〇四（明治三七）年、新宮高等小学校卒業から新宮中学入学を挟む時期のものである。後に春夫自身が自伝的小説「わんぱく時代」（『朝日新聞』夕刊、一九五七・一〇・二〇～一九五八・三・一七）の参考資料に使った可能性があり、また日露戦争開戦当時の新宮における生活記録としても貴重なものだが、文学的な目覚めはまだ読み取れない。

春夫は中学入学後、明星派の先輩の影響で短歌から文学活動に入り、一九一〇（明治四三）年に卒業。与謝野寛と生田長江を頼って上京し、慶應義塾に通いながら文学修行を開始する。後から二人の弟がやはり就学のため上京し、春夫と同居している。弟たちは父あての手紙に同封する形で欠かさず日記をつけており、そこに記された兄・春夫の生活ぶりが、文学資料としてはより重要な証言を提供してくれている。

末弟の秋雄は独協中学に通うため上京。一九二二（大正元）年九月から年末までと、翌二三（大正二）年一月から六月および一二月から一二月までの日記を残している。春夫が『詩文半世紀』（一九六三・八、読売新聞社）で回想し（文壇の梁山泊）と呼んだ根津権現裏の「超人社」での同居生活から始まっているのが興味深い。回想では、生田長江が家賃の共同出資を春夫に持ちかけ、月額八〇円のうち一五円を春夫が負担して住んだという。日記には、春夫のもとに藤沢清造や広川松五郎（画家・染色图案家・当時は新詩社で歌も詠んだ）が入り出したことが回想のとおりに出てくるし、同居人の生田春月に秋雄がドイツ語を習っている様子や、預けた荷物の受け取りに秋雄が徳田秋江を訪ねていること、また、春夫の訪問客に長島豊太郎（新詩社の社友での

ち新しき村出版部を起す）も見えることなど、文壇交友について新しく分かることも多い。

一九二二（大正元）年一〇月三日に兄弟は牛込に転居（住所未詳）した。三兄弟の母方の叔母（母・政代の姉）で、生涯独身だった竹田熊代が監督者として上京してきたためである。その後、夏樹が新宮中学を卒業し、やはり入学準備のため上京するので、一九二三（大正二）年二月二八日には矢来町のさらに広い借家（住所未詳）に移った。ところが、叔母がこの家の家相が悪いことを気に病み、実際に不祥事も多く発生したため、住み始めてわずか三週間目の三月七日には矢来町二六番地へと再転居している。

秋雄と夏樹の日記から分かる転居歴はここまでだが、新聞の消息欄によればその後も借家を点々とした事実があり、一九二三（大正二）年一〇月には矢来町三番地中の丸乙五〇号へ、一九二四（大正三）年三月には市谷左門町へ、同年一〇月には矢来町甲一七号岩崎方へと渡り歩いた。二年間で少なくとも六ヶ所住所を移すという慌ただしさである。

春夫・秋雄と叔母熊代・甥龍児（三兄弟の姉・保子の子で、母の協議離婚後、春夫の養子となり、家庭内で一時「冬樹」と呼ばれた）が住む牛込の借家に来た夏樹は、一九二三（大正二）

年三月から六月までと、翌一四（大正三）年一月・二月の日記を残している。一九一三年三月二十七日、春夫と夏樹は近代劇協会による「ファウスト」の初演を帝国劇場まで見に行き、春夫が坪内逍遙・森鷗外をはじめ多くの文士に挨拶したことや、同じ日に生田藤尾（長江の妻）から春夫のもとへ縁談が持ち込まれたことなどが新事実として興味深い。相手は日本画家・尾竹越堂の長女で「新しい女」の代表格と目された尾竹一枝（筆名「紅吉」。富本憲吉に嫁ぐ）。紅吉はその二週間後、春夫のもとを男装して訪問したというのがいかにもこの人らしい（四月一日）。通説によれば、春夫は「超人社」に間借りした紅吉を介して妹の尾竹ふくみを知り、プラトニック・ラブに悩んだとされてきたが、実際には紅吉との間で先に縁談が持ち上がったことになる。春夫と紅吉は松本泰、小沢愛罔らとともに、一九一二（大正元）年一〇月に創刊された雑誌『黒耀』の寄稿者として互いによく知っていた。

夏樹・秋雄の日記を総合すると、牛込転居後は春夫の文壇交友もさらに広がり、師匠格であった長江・寛・馬場孤蝶のほか、森田草平、徳田秋江、平出修、坂本紅蓮洞、堀口大学、生方敏郎、小沢愛罔の名がしばしば見えるようになる。秋雄日記には、本間久雄のワイルド訳を攻撃した『遊

蕩児』の訳者に寄せて少し許りワイルドを論ず」（『スバル』一九一三・六）の執筆風景も出ており貴重である（一九一三年五月五日）。文壇デビューが遅れる一因になったと考ええて春夫が後悔した一件である（恋・野心・芸術）『文章倶楽部』一九一九・二〇。このように、弟たちが残した日記からは、従来の年譜情報からは十分把握できていなかった、春夫の文学修行時代の実際の消息を数多く見出すことができるのである。

二 家族書簡について

さて、これから紹介する書簡もまた、デビュー前の生活状況を伝える春夫研究の一級資料である。新宮で医院を開業し、北海道の農場経営にも乗り出していった父・佐藤豊太郎（一八六二〜一九四二）からの春夫宛て書簡は、離れて暮らした時間が長いだけに膨大な数にのぼり、その年代も生涯にわたっている。なかには春夫に執筆資料を提供したなどの、素材研究の上で重要なものも含まれている。

ここでは整理済みの書簡のうち年代が最も古い一九一三（大正二）年のものから、春夫が「田園の憂鬱」（『中外』一九一八・九）によって名実ともに文壇デビューを果たす前年、すなわち一九一七（大正六）年までの芸術彷徨期に送

られたものを取り上げることにはした。一九一三年の書簡は、日記の欠けている部分を補うものであり、また一九一四（大正三）年の書簡は、春夫の最初の結婚や地代訴訟に關するものを含む。そして、一九一七（大正六）年の書簡には、「田園の憂鬱」の初稿「病める薔薇」（『黒潮』一九一七・六）に關する言及や、春夫の最初の結婚の後始末に關するものがあるが、一九一六（大正五）年、春夫が「田園の憂鬱」の想を得た神奈川県筑郡中里村での生活中に送られたものは、惜しいことにこの中には含まれていない。

新宮にも徐々に医者が増え、受け持ちの患者が減っていくなかで、豊太郎も医院経営の将来に明るい展望を持ってなくなっていた。書簡を読むと、東京に学ぶ息子たちへの父の期待には切実なものがあり、弟たちの手前もあって、春夫の芸術修業はのんびきならない所へと追い込まれていったことが分かる。生田長江、与謝野寛、馬場孤蝶といった文壇の先達にすぎるような思いで息子を託していた豊太郎は、春夫の作品が活字になるのを新宮で今か今かと待ちつづけていた。

デビュー直後、春夫は父について次のように述懐している。

私は十二歳位から文学に志を立てた。それは私の家の血統の中にさうした傾向があるといふ事を考へたからである。代々医者をしてゐるから、其必要上漢文学の趣味が古くから家に入つてゐた。鏡村と号した祖父は、二十七歳位で夭逝したといふが「鏡村詩稿」一卷を遺してゐる。父は鏡水と号して、日本でいふ普通の文学——俳句、漢詩、絵画の趣味を解してゐる。そして、今でもさうだが、新しい思想にも同情をもち、それに対して研究的態度をもつてゐる。生田長江氏は私の父をよく知つてゐる。何時か氏は戯れに、「君はゲエテのやうな父をもつてゐるのだから、君がゲエテのやうにならなかつたら、それは君の境遇が悪いのではなく、君自身が悪いのだ。」と云つて、私を激励して呉れた事がある。（『恋・野心・芸術』）

ゲーテの父のように、豊太郎が極めて教育熱心であったことは、書簡から如実に窺い知ることができる。長男が家業を継がず、文学を選んだことに、豊太郎は苦り切つて見せているのだが、一方では自身も俳句を嗜む洒脱なところを持った趣味人であった。佐藤家が医業のかたわら家塾を営み、文学的素養を豊かにそなえた家系であったことは、

豊太郎にとっても一つの矜持だったのである。それゆえ一九一八（大正七）年に春夫の成功を確信したときには、父としての喜びもひとかたならぬものがあつた。

今回の翻刻では、新宮の豊太郎から上京中の春夫に宛てて送られた書簡だけでなく、一括りにして残されてきた家族の書簡も一緒に掲げることにした。そこには豊太郎が東京にいる春夫の同居家族に宛てた書簡や、兄弟から春夫に宛てた書簡なども含まれる。家業に背いた春夫は、父に直接経済的な援助を申し出にくい立場にあり、生活基盤は弟たちの修学状況や父・叔母の意向、妻の実家との関係によって容易に左右される状況だったことが分かる。あえて豊太郎書簡、春夫宛書簡のみに限定せず、春夫周辺の家族間のやりとりまで掲げるのは、春夫の芸術修業の実態が決して暢気なものではなく、家族の理解を得ながら綱渡りのようにして維持されたものであったことが、そこから明瞭に見えてくるためである。

凡例

・見出しの日付は差出人の記述によつた。見出し下の（一）内の整理番号は、発見時の保管状態を示す通し番号である。

・漢字は原則として常用漢字に改めた。仮名遣いは原文に従い、変体仮名は現在の通用自体に改めた。ただし、濁点等の脱落も原文のままとした。また、「一」（事）「ヒ下度」〔被下度〕「ヒ成度」〔被成度〕「二」「ハ」「、」「ッ」「、」「（日）」も原文のまま残した。

・送り仮名は原文に従い、明らかな脱字のみ判読の便宜のため「」で補った。

・誤記はルビに（）で訂正するか、「ママ」を付した。翻字に疑義が残るものは、ルビで「？」を付した。

・判読不能の箇所（毀損箇所や字形の崩れ）は□とした。

三 書簡翻刻

一九一三（大正二年）

1 一〇月二日 佐藤豊太郎 佐藤政代・保子宛（封筒）72〔本文〕74―⑤（封書 佐藤医院箋二枚 墨書）

（表）東京小石川上富阪

君か代館にて

佐藤春夫

同 まさよ殿

転宿致し居候ハ、早速御とゞけヒ下度候也

(裏) 十月十二日朝

キイ新宮

佐藤豊太郎

(消印) 新宮 □・□・12 前10-12

小石川 2・10・14 后3-4

牛込 2・10・14 后5-6

段々冷氣ニ相成候 今日ハ家を構へた通知があるか今日ハあるかと毎日まつ〔て〕居た処昨夜手紙参り候へともまだ家もできず候由今度之行ハ途中より色々苦勞致し候由故保子病氣かまるいのでハあるまいかと心配致し候処左様にも無之此段ハ安神致し候へども家も定まらず困り候事と存候此方にてハ皆々無事ニ居り候御安神可ヒ成 子供二人ハ機嫌克遊マツひ候 神林や山本酒屋橋爪の子供達遊マツひニ参り嬉戯致し居り候 昨朝も智恵子ニ大きくなつて何になるかお飯をたく人ハとうじやと云へハ そんなのハイや 柿うる人ハ それもいや 痔ぢをなをす人ニなるのじやといふ 痔をなをす人ニなつて保子さんの痔をなをしてあげるのかと問へハ そうじや 傍から冬樹ハ そんなもの何にもような

るものか ばゞになるハ(男がぢゞになり女かばゞになるこれほど間違ひのない事ハないと大笑ひニ候) 智恵子のかしこい親思ひハ一通りじやない

こんど来た女もよく用事をして居る様じや わたしハまだ顔も名もろくにしらぬが

患者も可なりあります 収入も割合ニありますが昨年一昨年よりハ一千元ハ少ない見込です 併しよそにくらぶれハまだよいのです

○手紙ニハ金五十円おくれと書いてあるが一昨夜電報にて三十円おくれと申来り候ニ付電かわせにて昨日朝おくり候 それ故五十円ハ見合せ候 入用ならハすぐ電報次第おくります 併し電かわせハ間違ひが多いから可成外のかわせの方よろし

玉川の新町の事くわしく申来り又書類も見候 よろしき処と思ひ候 勘定して見ると大畧

一 千八百五十五円 土地二百六十五坪 此一坪七円也
一 千百弍拾五円 家屋建坪二十五坪

一 二百六拾五円 井戸その他 此一坪四十五円
計 三千二百四十五円

此一分五り 四百八十六円二十五銭 即時払金額

残金式千七百五十八円三十五銭

右二付一ヶ月凡ソ三十五円五十銭支払

右の様な勘定二相成十ヶ年間毎月三十五円五十銭はかり払ふ様な事二相成可申候

毎月の電車代東京二居るより十円以上ハよけい二入り可申存候 此銭如何と存候

今夜手紙見てより眠らす今八十二日午前二時の鐘をききながら此手紙認め候 此頃何年間も夜分眠らぬ様な事無之喜ひ居りしに秋雄之手紙にてがつかり致し候 何故ニ勉強せぬか わたしは子供等の為ニ一身をすてるまでニ思ひ候ものを 三人共わたしの思ふ様な人物ニなれず何事もいやになり申候

十月十二日朝

豊太郎

としゑとの保子どの

〔冒頭欄外〕土地の事二ついでこんな事勘定もして見たが

秋雄ハ勉強せず兄ハ手紙もおこさず何もかも
いやニなつた おまへもみなをほつて帰つて

おいで

*としゑは春夫の母（豊太郎妻）政代を指す家庭内の呼び名と考えられる。保子は春夫の姉。本文は書簡8（一九

一五年七月一六日付、整理番号74）の封筒にまとめて保管されていた九点の文書の一つ。別に日付の一致する空の封筒（整理番号72）があり、内容上の脈絡からここに納まるものと推定。封筒の宛名が、春夫と政代の連名になっている点については、さらに慎重な検証を要する。

*一九一三年で正しければ、これは夏樹日記・秋雄日記の欠けた時期に届いた書簡である。直前まで小石川の旅館に暮らしていたらしいが、すでに書簡3の矢来町三番地に転居後であったと見え、転送の消印が捺されている。この時期、駒沢に土地を購入する計画があったようだ。

*冬樹は保子の子で春夫の甥にあたる龍児（一九〇八年生）と考えられる。六月の日記では牛込に同居していたが、この時はもう新宮に戻っていることになる。智恵子は龍児の妹（一九〇九年生）。

2 一〇月二日 佐藤豊太郎 佐藤秋雄宛（本文）74⑨

（封書 佐藤医院用箋一枚 墨書）

成績申来り驚キ申候 十六番マデ下リタトハ誠トハ思ヘズ
何ト言フ不覚ノ事ゾ 父ハ只汝ヲノミ楽シミニ老行クヲ
忘レ家業ニイソシミ只日月ノ過クルヲ楽ミ居ルハ御身達之
学業ノ進ムヲ喜ブ故ニテ自分ノ老行クヲ喜ブニハ無之 御

身達ノ学業ハ段々人後ニ落チ自分ハ段々死ニ近ツク 何ノ
楽ミアリテ此世ニ処スベキ 御身達ハ何ノ為ニ遠ク家郷ヲ
離レ帝都ニ居ルカ能ク御考ナサルベシ 学業退歩シ何ノ面
目アリテ再ヒ父ニ面ヘラルヘキ ヨクヨク御考ナサルベシ
勉学ヲイヤト思フナラバ強テ学問スルニ及バス農工商何レ
ニモ報国家ノ業アリ 財ヲ費シ胆力ヲ費シイヤナ学問スル
ニ及バス 速ニ癡学スベシ 父ハ春夫ノ為ニ失望シ夏樹モ
亦充分ノ成績ヲ見ズ御身コソハト望ヲ嘱シ日夕忘ル、ナ
シ 今後ハ母ヤ兄ノ言ヲ聞キ自ラモ亦反省シテ元ノ優等生
トナランヲ望ムベシ 能ク考ヘテ後返書ヲ送レ 此手紙
ハ十月十二日午前之二時瑞泉寺之鐘声ヲ聞キツ、孤燈ノ下
泣テ認メタルモノ也

秋雄殿

父

*書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。もともと書簡1
に同封されていたと考えられる。春夫は文学に志し、夏
樹は慶應理財科志望のため、独協中学でドイツ語を学ぶ
秋雄が医師の後継者として嘱望されていた。成績不振を
詰り、かなり強い口調で奮起を促している。

3 一〇月一八日 佐藤豊太郎（封筒）80〔本文〕74③

（封書 絵入封筒 佐藤医院用箋二枚 墨書）

（表）東京牛込矢来町三番地中の丸乙五十号

佐藤春夫殿

（裏）封

十九日発

十月十八日夜半認む

和歌山県新宮町

佐藤豊太郎

（消印）欠

牛込2・10・22 后213

御手紙披見致候 御無事之由大慶ニ候 此頃寓居おちつき
多少読書も出来候半と存候 筆とる気分二もなり難く候由
如何なる時も可有之候 母も春以来余り健ニ無之候ひし故
寒氣相成候ハ、如何やと心配致し候 皆々いたわり候様頼
み入候 秋雄第一学期の成績面目からさりしとき、落胆大
かたならず 道理のわからぬ男ニも無之候へハよく話
し放心せぬ様御申聞ヒ成度は亦頼入候 駒沢村地処之事母
ともよく相談致し違算なき様可ヒ成 都会之地詐欺者多く
候間買売など殊ニ注意肝要ニ候 金も十二月末まで二ハ叔

母分と合せ三千五百円位イハまとまり可申候へど七八百円ハ費し可申式千五百円ハ地処の方へ遣ひてもよろしきかと叔母御申され候 著作の方ハ如何 金を要すべきや 又土地買入る、とせハすぐそれへ建築するかその辺意見申越され度候 こちらも多少之予備金も可要母人之胸算も御き、可ヒ成候

張箱氣〔に〕入り候由 蓋少し小さきよし 十分ハこほる、と申せハ少し不足の方よろしからん 此頃妙心寺より錦絵くれ候 その内五枚ばかりよきもの有之候 小包之序ニおくり可申候間こんなもの買売する処にて見てもらひ良否御申こしヒ下度候

却説駒沢村之土地面^(目)目き処ニ存し候 一度見度とハ思ひ候へとも今之処見ニ行事も出来ず御許も著作などか無事様ニ相成候ハ、老父もそんな処ニ残年を送り候事も出来可申 いか嬉しき事か

此頃画も出来候由序ニ御見せ可ヒ下 予も夜永のつれく漢籍を見候 幼年之頃学ひ候ま、(九才之時迨祖父百樹道敏翁御在世素読を受け巳ニ孟子半ニ至り翁他界と遊その後世の變遷ニて全く癡^マ学) 打捨て顧みさりしが支那文学も中々面白く候 御許も閑々ニハ御よみ可ヒ成 今後ハ西洋はかりニあらず支那ニ力をつくさ、るべからざる様ニ候

御許ハ今之ま、進み行一家をなすに至らハ結構ニ候 両弟ハ東西わからず能く教へよく導き成業致させ候様くれく頼み申候

先右迨 早々

十月十八日 お祭之やつと済たる日

孤燈之下虫声の唧唧をききつ、

父

春夫様

〔冒頭欄外〕手紙ニよれハ筆をとるのかいやとか又とりても書けぬ様な事かあるとか 右様之事ハ坐禪をするか又ハ催眠(自己催眠)ニより直るものニ候 よく御考へヒ成へく候 坐禪をすれハいやと思ふ事少なく相成候故ニどんな事でもできとんなものでも食へる 自己催眠も同様 予も両方より無情気少く成申候 併し坐ぜんハほん(の)はしくれ 野狐禪ニも至らず

*本文は書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。別に空封筒があり、日付が一致。(寓居おちつき)ほか、秋雄の成績の件、駒沢の地所の件などの記事が見え、自然な脈絡になるためここに入れた。

*「からもの因縁」〔支那雜記〕一九四一・一〇、大道書房

ほかで回想されている豊太郎の漢学趣味が実際に窺われる書簡。書画骨董への愛好も見え、錦絵の売り先を相談している。春夫はこの書簡に返事を書いて承諾したらしく、4(日記)の一月二日の項に錦絵を送る一節があつて、前後関係の辻褄があう。

*春夫が文学で大成したのち、駒沢の地所に余生を送りたいたという。将来の夢を語りつつ、遠回しに息子を叱咤している。執筆不振には座禪・自己催眠がよいと勧めている。

4 一二月〔年推定〕 佐藤豊太郎(74-⑤)

(封書 封筒欠 佐藤医院用箋二枚 墨書)

十一月一日晴天 天長節ハ今年ハ三ヶ日賑ヤカスノジヤソ
ウデ昨日同様賑カナリ 十一時ヨリ高等女学校ノ成川
ト云フ先生ノ肛門ノ手術ヲ行フ 油屋別荘ニテ一幅会
アリ 自分ハ石川柳城翁ノ秋景山水ヲ出ス 尾崎氏ノ
直入水墨 松野氏ノ竹村等佳ナリ 垣遠氏ノ拜山頗ル
好評 留守中古畑氏来訪ノ由不逢 夜早く就床 唐詩
選ヲ読ム 小児時代ニ読ンタモノモ多少覚ヘ居レリ
油屋ヨリ会席料理贈ラル

二日晴 日曜日 今日も賑カナリ 仮装行列数組去来ス

午後松山ニ行ク 蜜柑ノ赤ラミタルモノ点々見ユ 東
京へ小包送ル 錦絵数葉、英世博士(性氏ヲ逸ス)ノ
記事アル医事周报一頁封入 蓋シ博士の努力ニ感スル
処アレハナリ 熊代女ハ収入アリテモ費途多ク先月ハ
公課(役場へ出ス金)壹百円ニ及ブトコボス 此人ノ
コボストドナルハ持病ナンメリ 併シヨク金ノ入ルコ
ジヤト自分モ感心スル 年ヲトルトツマラス事ニ感心
スル 此朝古畑氏再ヒ来訪 カステラ贈ラル 柳城翁
山水幅表装出来預リ置キタルモノ渡シ表具料受取勘定
スム 氏ハ小児ニ此賑イヲ見センタメ来レリト 按外
ノ賑サニ驚イタト話サル 平尾井ヨリハ少シ繁花ナラ
ン
三日晴 午前中患者少シ 往診多ク午後多用ナリ コウナ
ルト一日中ノ手都合悪敷困ル 夜ニ入りテ帰ル 夜下
熊野地へ往診ス 秋雄ヨリ一日出ノ羽書来ル 運動会
ニテ二番デ賞品ヤ「メタル」ヲ頂イタソウナ 身体
ノ強健ハ何ヨリ結構ト独リ喜ヒニ耐ヘズ 今月八日ニ
大前と前久保ノ追善会ヲ宗応寺デ執行スルソウナ 何
程ヨク出来テモ友人カラ追善会ヲシテモラウ様デモツ
マラス 能ク出来テソシテ身体ノ強壯ナノカ一等ヨイ、

雑誌ヤ新聞ヲヨンデ寐ニツク 九時半

四日曇 朝ハ寒シ 始テ綿入ヲ着ル 鶴殿ノ西伊七郎老人
大腿ノ上皮癩切除ヲ行フ 老人トツテ七十四才達著自
慢デ痛イ顔モセヌ 尤モ充分局所麻醉ハシテアルガ多
少ハ疼ムテアロウ 入院シタガ例ノ通りハケマシヤデ
皆困ル 夏樹ヨリ手紙来ル 新聞モツク 小包モ菓子
カ入ツテアルト冬樹智恵大喜ビ 罐ヲ抱ヘテパクツク
古襦袢四枚アリ 叔母曰ク東京ヘ置テ来タカトラレタ
ノデモ無カツタ

春夫ハ時事新報ヘ何カ出スソードソノ新聞ヲ見ルヲ
今ヨリ待ツテ居ル 夕方松山ニ行ク 下熊野往診ノ序
ナリ、田中遼漢氏来ル

大島ノ宿所ハ大阪天満岩井町一丁目一三八森岡石方
此日細魚売始メテ来ル 壱尾三錢五り

五日晴 払曉神ノ内往診。細魚売たち魚売多シ さよりハ
式錢ナリ 下熊野地往診之序蜜柑一袋モツテ来タ 明
日ハ栄次郎之輿入デ昨夜井野登地栄次郎等応接所ニテ
会議ガアツタソーナ

今日ハ一日イソカシイ日テアツタ 漸ク八時過キテ机
ニ向フヲガテキタ 冬樹ト智恵ハ灯燈行列ノマネ
ハガリスル 今夜ハホウヅキ灯燈ニ火ヲ点シテ持チ行

ルク故火ノ用心カワルイト叱ツタライワイト泣イタ

*書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。一月二日が日
曜日とあるため、一九一三(大正二)年のカレンダール
から年代を推定。豊太郎は東京遊学中の息子たちの生活報
告として新宮宛の手紙に日記を同封するよう指導してい
た。これは逆に、東京に出ていた妻のために、豊太郎の
側の日常報告として手紙に同封された日記と考えられ
る。どの書簡に同封されていたかは不明。

*南画の展示会に見える名は、石川柳城、田能村直入、田
近竹村、吉嗣拜山。熊代女は妻政代(としゑ)の妹で、
春夫には叔母にあたる竹田熊代。東京の春夫兄弟の監督
役であった熊代が新宮に戻っているため(冬樹を連れ帰
ったか)、入れ替わりで政代が上京した可能性が高い。
熊代の人物評から豊太郎の俳人らしいユーモアが垣間見
える。大前の追善会とは、豊太郎の患者で、一九〇六年
末に結核で病没した大前十郎のことか。十郎の妹・俊子
が春夫の初恋の相手として知られている。秋雄が運動会
でメダルを取ったことに気をよくし、勉学よりも健康が
第一だと考え直している。

5 一二月一七日〔年推定〕 佐藤豊太郎 佐藤政代宛

(74-④) (封書 封筒欠 佐藤医院用箋二枚 墨書)

このころハお寒うなりました。皆ぶじで勉強しますか。こちらハ皆たつしやでくられます。地代せしよの方も一つハ四銭ニはんけつなりました。此事しらすまへとおもうて居たが保子より云ひおくつたそうである。一月に熊代ゆくといふのでその時くわしく話してもらおうつもりであつたので今までいふていかなんだ。まだはんけつ書もこぬのでくわしい事ハわからぬ。はんけつ書がきたらそちらへおくつて平出さんにもかんでいしてもらい。こうそしようかと思ふ。四銭ぐらいならむりハないと思ふけれど、もすこしはらに入りにくい処があるので。一月から熊代そちらへゆきかわるといふので。そうしてほしいと思ふ。色々と内の事もそうだんせねばならず。わたし一人ハ思ふようにゆきにくい事が多いからそちらも御前かいる方がみなよいのであるうけれどこちらか本であるからこちらのつごうもかんなかへてもらわねばならぬ。わたしも何かと心ばいばかりしておもしろくないので一月からハぜひかわつてほしい。もう年のくれになつたが新宮ハ人気がわるいといふ事で金まわりがごくわるい。はさんする家もある。店屋も何かうれぬそうな。

春夫天草へゆくとか時事新報にもかいてあつたか夏樹のはがきにもかいてあつた。用事があるからゆくのであろうが金をつかわぬように。内も金がすくなくなつて困る。医者か多くなつた故か皆こまるようすじや。松井も病室をこしらへてあつたが家をかへしてしまつた。十倉が来て歯科をやつて居たが一日二人位よりないのでやめるといふて居るそうな。

内も入院ハない。外来と往しんで四十人あまりハ毎日あるがまあひまじや。

古坐のばゞもきたが藤助殿の処に居る。古坐のよめが金をもろうてこいといふておこしたらしい。こまつた事じや金をやつたらよめがいつまでもせわするかどうかわからぬゆへやらぬつもりじや。どちらからもこちらからもせめらるゝので困るよ。

一月ニハぜひかへつて下さい。色々とはなしもある。内のつごうかおまへがないと大へんにこまるからね。もちも近日二ついて小包でおくる。

汽船のちんやすいはいだつちんかたかかいうじや。先日の大きな箱もはいだつたかかたかと思ふ。

夏樹、秋雄ハ勉強するか。わたしは子供の事ばかり思ひ夜もねむらぬ事たびゝで困る。どうか三人がはやく世に出

て今のくるしみを昔しばなしにする時せつをまつばかりてある

雨につけ風につけても先だつは子を思ふゆへのなみだなりけり

十二月十七、朝
としゑどの

豊太郎

〔冒頭欄外〕今日ふりかへて金五十円送り候

*書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。春夫の天草旅行は夏樹・秋雄日記から、一九一三(大正二)年一月二日東京発、翌一四(大正三)年一月一日東京着と判明しているため、これを年代推定の根拠とした。島原の乱に取材した戯曲を書くつもりで出かけたというが、長崎・島原の滞在だけで資金が切れ、結局天草には渡らず、戯曲も成らなかつたという。「再遊長崎」〔改造〕一九二七・八)、『日本の風景』(一九五九・七、新潮社)に詳しい。

*豊太郎が地代訴訟の控訴を相談しようとする平出さんとは、雑誌『スバル』の出資者で大逆事件の被告弁護人も務めた平出修(一八七八〜一九一四)のこと。一九一四(大正三)年一月一六日の夏樹日記に、〈兄上訴訟用にて鎌倉に平出さんを訪ふ〉と見えるのはこれを受けてのことだ

ろう。しかし、平出は同年三月一七日に骨瘍症で病没している。「一疋の野兎とさうして一人の外国人」〔我等〕一九一四・四、のち「歩きながら」に改題)は、一月の訪問のあと、重体に陥った平出を再訪しようとして、会えずに帰る路上での観察を題材にしている。

大正三年

6 一二月〔年月推定〕 佐藤豊太郎(74⑧)

(封書 封筒欠 佐藤医院用箋二枚 墨書)

昨日より夜にかけ閑暇にて色々御地にての事情聞申候 行違ひ等の事もあり心配され候事と察し申候 兎二角成立致し候ハ、結構二候 母ハ御承知之一徹故先方之感を害し候様な事無之や心配致し候 出立之時もくれく申置候へとも水寫様へも手紙にておわび致し置候 老父も一度上京致し度思ひ候へ共只今之処出遊六ヶ敷候

水嶋様も一月二ハ大阪へ御うつり之由二候へハ其以前(一月さし入ニ)披露致し候様致され度母在京中大低之事ハ致し候ものとのみ想像致し候処ホンの引取り丈け之事にて何も致さず候由先方様ニも一人娘の事故夫々の手はづもなされ度ハ勿論之事ニ可有之候へハ婚禮式も披露宴もかねて一

月早々ニ致し候てハ如何と存し候 老父も立派ニ致し度ハ山々に候へど時節から思ふ様にも参らす候ニ付費用ハ老百円位にてすむ様ニ致し先方御両親御近親御許等兩人之親友位にて小宴致し候てハ如何と存候 尤も友人と申しても多き事なるべく候へハ限ある費用にてハ多数ハ六ヶ敷からんが顔ぶれもよく考へ親疎之別を明かに致し候様なさるべく岩橋へも形式的にて御相談なされ候方宜き候間此〔次〕第もわけて申添置候

画展覽会一月ニ相成候由ニ候へハ此展覽前ニ披露等済ませ候様ニせらるべし 水嶋様も一月早々大阪へ引こしなさるなら猶更と存候 保子ハ多人數之中へ出る事ハ好む間敷候へハ岩橋と秋雄之参り可申存候 秋雄いやならやめる 人數方法等御相談の上当方へも御通知置ヒ成度候

尚申置度ハ幸子ハ生家両親とハ余り近くせざるもよしといふ様な口吻であつたとか母の話ニ有之候へともそれハ心得違ひニ可有之 新二夫を得候とて生之両親永く養育之大恩を忘れてハ不相濟候間以前ニ倍し孝養をつくし候様心かけ可ヒ成此事くれくれ御話可ヒ成候

母ハ余程氣ニ入り候様申居り候 叔母も春二なつたら遊びニゆくと申居り候 其節多少苦言ハきかねハならぬ事と存候へとも御承知之人物六ヶ敷事ハ無之幸子にして一二日同

棲致し候ハ、二十數貫之巨身掌上ニ翻弄する事茶飯之事ニ候 よく御話置可ヒ成候 早々 老父

春夫殿

早々

母曰く人數きまり候ハ、料理屋へ幾何金にてとまかす方よろしいとの事也

〔冒頭欄外〕 竹林様と申方へ手紙をあげよと母申候へとも御名もしらす御住所もしらす候間御序ニ御しらせヒ下度候也

*書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。春夫の最初の妻、遠藤幸子ゆかこは元芸術座女優で川路柳虹の庇護を受け、川路歌子うたこの名で舞台に出ていた。一九一四（大正三）年三月、澤田正二郎、秋田雨雀の芸術座脱退組に加わり、美術劇場を経て新時代劇協会に転じた。幸子は本郷追分にあつた万年山勝林寺の住職の姪にあたるという（江口渙『わが文学半生記』一九五三・九、青木書店）。生田長江の肝煎で、青鞥社の文学講座がこの寺で開かれていた関係から春夫と知り合ったものか。

*春夫と幸子の婚礼については、新聞消息欄に（佐藤春夫

氏は水島爾保布の媒酌にて女優川路歌子氏と来る廿五日某所にて華燭の典を挙ぐる由(「よみうり抄」『読売新聞』一九一四・一二・一六)と報じられた。竹林様とあるのは武林無想庵。川路歌子のファンで春夫ともかねて親しく、「新しい男女」(『読売新聞』一九一五・一・一〇)を書いて二人の結婚を冷やかした。

7 一二月三一日(年推定) 佐藤豊太郎(74-②)

(封書 封筒欠 佐藤医院用箋二枚 墨書)

夕方手紙出し置候へ共只家内とも相談之上彼之意見ニより更ニ一書出し申候

前ニ平井氏(秋雄友達の父君)之意見を聞き候事有之懇切ニ指示致しく候様 片山弁護士より之手紙其内御手許へ参るべく候ニ付それを平井氏へ持参せられ同氏之意見聞取御許ニて筆記して御送りヒ下度 氏之意見ニして見込ナシトセハ断念可致 素より江木博士之御意見を信せざるにあらすと雖も片山の意見書など持参致し御覧ニ入候事も失礼ニも可有之且つ余りくどくどしく伺ひ候様ニも参り申間敷平井氏ハ前之関係上聞やすくも候へハ今一応御面倒ヒ成度 迂老ハ御許之意見も電音ニて承知致し候へハ不得止と存候へ共関係之人々之手前も有之片山などハ矢張多少之理のある

様ニも思つて居るかの様ニも思はれ候ニ付同人之意見書ニつき更ニ平井氏なり又ハ他の反論(又ハ賛詞)御書き送りヒ下候ハ、それにて充分会得可致 万一片山森等之意見ニして採るに足る事あらハ結好(標)なり

御許も何かと用事もあらんに面白くもなき事ニ奔走し候事まことに氣之毒ニ有之且つ幸子にも余り日も浅きに不面目ニ思ひ候へ共多年ニ渉る事ニて相手方之やり方憤りニ耐へず候へハ金錢としてハ余り多額のものにも無之候へとも争へる余地あらハと我も思ひ関係者も思ふまで也 其地ニて何れの意見も駄目とすれハ当方之関係者弁護士等何ト云つても駄目なれハ敗ケとして閉口するのみニ候 何分よろしくたのみ申候

只今電報でもと思ひ候へともどうせ元旦や二日ニどうする事も出来ずそれ迄ニハ此手紙つくべく期限も一月六七日頃までハあるべけれハと存し手紙出し候事ニ候 早々

三十一日午後九時頃

豊太郎

春夫様

早々

*書簡8に封入保管の九点の文書の一つ。一九一三(大正

二) 年末の地代訴訟の控訴の件が長引いている様子が分かる。新婚の春夫・幸子を巻き込むことについて気が毒がつている。

大正四年

8 七月一六日 佐藤豊太郎 (74-⑦)

(封書 佐藤医院用箋二枚 墨書)

(表) 東京牛込区新小川町三ノ二十

佐藤春夫殿

(裏) ヌ

七月十六日

紀新宮

佐藤豊太郎

(消印)

□□ □□ □□ □□ □□ □□

牛込 4・7・ 前9-10

二三日ハ非常ニ暑い 錦地も同様或ハ一層甚しい事と思ふ
兩人無事可賀 夏樹も熊本へ参つたとの事二三日前羽書参
り候 入学してもよし出来ねハ慶應理財科ニ留まるもよし
此頃の傾向でハ無理に医になつても困るべし 新宮も医者

がだん／＼増し皆困るゝと云つて居る 下本町鹿六の角
から外阪の此内込二八人とハ驚くべし コレカラ先ハ何が
よいかのかつかぬ 十年も先ハ御許等兩人の仕事が最も世
の中に歓迎されるかもしれぬ 元ハ医者弁護士であつたそ
うなが近頃画家の世の中じやと人がいふ 次ハ著作家芸術
家の世になるであらう 折角勉強か肝心じや

母親の病氣もずつと快くなつて今朝あたりハ又床を出て彼
是して居る 死ぬ迄働らくつもりらしい わたしハ非常に
心配して居るか本人少しも頓着せぬ 人間総てハ精神的の
ものらしい

訴訟の事でも色々心配をかけた これハ棄却にハなつたが
実ハ当方が有利な裁判で先方が坪十銭といふのが四銭にな
つたのであるから夫れ以上を望むハ或ハ当方の無理かもしれ
れぬ 当方より先方が不平を云つて居るかもしれぬ 事ハ
落着する迄の事ゆがみなりにでもかたつけハ跡ハ後の事又
何かなるであらう

幸子からの雑誌喜んで見た 好評で結構 油断なく研究せ
られたし 但し大暑之時ぶん登場する様な事ハ躰ニ害ある
べし 無理すべからず

母が病氣を心配してくれて井野妻君那智観音へ祈願の為参
詣してくれた処暑い日であつたので中暑して大熱大下利を

起し赤利ニでもなりそうで一時ハ心配した それニ井野老人ハ遣遠子^{マコ} 大阪ニ開業するとて上阪の留守なり 痛く困つたが二日ほどで段々快くなつたがまだ全快せぬ 羽書でもやつて見舞をいふて下され 居ハ(新宮浮島一力楼内 井野きし)

○秋雄も二十日ニハ試験かすむそうで皆まつて居る わたし共ハ季子である故か殊更彼の成長をまつ事が切である 竜児も毎日わるさばかりして困る 海水や水泳ニゆきたがるが若し過でもあつてハ「と」やめさして居る 秋雄か帰つたらつれてゆくであるう

出版界も甚しく不景氣そうな 秋ニもなつたら何か作物かてきようか 面白いものができたら見せてほしいものです 反嚮^{マコ}といふ雑誌を毎号おくつてくれて居ましたか癡刊^{マコ}ニでもなつたか 此頃参りませぬ

七月十六日朝

春夫殿

幸子殿

豊太郎

*封筒には九点の文書がまとめて入れられていたが、日付から判断してこれが本来封入されていたものと考えられる。

*新宮に医師が増え、病院経営の将来に絶望している。(次ハ著作家芸術家の世になるであろう)と半ば捨鉢に春夫を励ます。鹿六は鰻屋の屋号。外阪は豊太郎の病院があつた城山の山麓で、一般には「登坂」と書く。控訴棄却と母の病についても報じる。

*幸子は女優を続けており、一九一五(大正四)年六月二日から三〇日まで三日間、帝国劇場の文芸座第一回公演「悪魔の曲」(林和)に女弟子小川よし子役で出演した。

*『反響』は生田長江・森田草平が主宰した雑誌で、一九一四(大正三)年四月創刊。一九一五(大正四)年五月号で休刊ののち、同年九月に復刊したが、発禁処分となつたためそのまま終刊した。この雑誌に春夫は「曾哲の答」(一九一四・六)と「錬金術」(一九一五・三)を、幸子は川路歌子名義で「おみさ」(一九一五・九、発禁号)を掲載している。

大正六年

9 八月二五日 佐藤豊太郎 (37)

(表) 東京本郷区動阪町九二

(葉書 墨書)

佐藤春夫様

紀新宮

佐藤豊太郎

(消印) 新宮 6・8・25 后619

朝夕冷気を覚候 益多祥賀上候 当方一同無事 御放意可
と成候 只今夏樹より手紙参り岡本之件ハ兄貴より直接父
へ申来る云々二候へと御許よりまだ消息二接せず 岡本氏
も銀行を辞し家計いさ、か困憊と見へせひ月末まで処理せ
よと又申来れり 老父頗る気の毒ニ思ひ候も筋道を明にし
たる上ニ致さねハ気もちあしく消息相まち候
二科作品出来候や 又黒潮宛作品如何
南画之新書着せず これも如何ニや「み、すのたはこと」
閲覧 翁の一節を読みてなきて後

八月廿五日午後

*一九一六(大正五)年五月から年末まで、春夫夫妻は神

奈川京都筑郡中里村に住んだ。上京後、遠藤幸子は一九

一七(大正六)年二月に赤坂溜池の演伎座で「日の出る国」

(佐藤紅緑)に出演、舞台生活に戻った。この頃、麴町区

富士見町五二〇(幽霊坂)で送った窮乏生活の状況は、

のちに「都会の憂鬱」(『婦人公論』一九二二・一〜一二)

の素材になった。四月頃、下谷区花園町一番地の上野俱
楽部四三号室に転居。六月には幸子と破局を迎えるが、
同月には谷崎潤一郎の知遇を得、また同じ二七日に芥川
龍之介の『羅生門』出版記念会で幹事役を務め、会を成
功させている。

* 動坂町九二番地には七月に転居。岡本氏とあるのは家主
の岡本善二を指すか。

* 二科作品とは、九月に二科会展覧会に出品した油絵「上
野停車場附近」と「静物」を指す。また、黒潮宛作品と
は、掲載を約束されていた「病める薔薇」(『黒潮』一九
一七・六)の後半部の原稿を指すと思われるが、まさか
の掲載拒否に遭い活字にならなかった。これに発奮して、
春夫は年末に「田園の憂鬱」を新稿として書き始める。

* 徳富健次郎(蘆花)著『みみずのたはこと』(一九一三・三、
新橋堂書店・服部書店・警醒社書店)に感激したことを春夫
に伝えている。翁の一節とは、「関寛翁」を指すか。北海
道開拓に身を挺した老人の姿に自身を重ね合わせたもの
と思われる。

10 一 一月三日 佐藤夏樹 佐藤政代・米谷香代子宛

(140)

(葉書 ペン書)

(表) 紀伊国新宮町下本町

佐藤とし枝様

香代子様

夏樹

(消印) 麻布 6・11・3 后718

拜啓 無事御着なされ候由一同大に安心仕り候。こちらも皆無事に御座候間御安心下され度候。御手紙その他着仕候間之も御安心下され度候。こゝ両三日忙しく候間くわしく御手紙さし上げ申さず候間あしからず御願申上候。兄上も専心原稿執筆いたしおり候。遠藤家よりどうぞその他おわん御膳手道具一切取戻し候。御約束のたんす大勝利。父上叔母上姉上へよろしく

*一九一七(大正六)年九月より、春夫は幸子の後輩女優の米谷香代子と同棲を始めた。遠藤家に残された生活用品を夏樹が取り戻しに行ったことが報告されている。このとき香代子は春夫の母・政代に伴われて新宮に行き、後から来る春夫を待っていたものと思われる。春夫が執筆中の作品は、生田長江に寄稿を依頼された「ある女の幻想」(『中外』一九一七・一二)のことであろう。

年代不明

11 五月二四日 佐藤豊太郎(81)

(封書 封筒欠 佐藤医院用箋一枚 墨書)

漸く新緑之時節二成申候 此年ハいつ迄も冷氣ニ有之變調ニ存候 先月ハ生半送られ面白く読申候 已ニ申送り候通り早教育と天才と申書読候 御許之如き全く父母之無学より今日之苦勞をなさしめ候ものにて半夜静ニこれを思ひ候へハ氣之毒ニ堪へず候 二孫之教育ニついても一層苦慮致し候 就中智恵子の如きは一步を誤まる時ハ間違つた人物ニ成るたちにて我等兩人之心配も一通りてない 暁星でハ小学児童もあづかつて習へて居るか 此学校之風や規則をしらべて早く送つてほしい たしか与謝野先生之小供達もこゝに居らるゝ事と思ふ 捨ておかず早々御返事相待ち候
五月二十四日 父

春夫殿

*封筒がなく年代不明の書簡であるが、木村久一『早教育と天才』(一九一七・四、心理学研究会出版部)の出版年代から、新刊で読んだとすれば一九一七(大正六)年である。智恵子はこの時、満七歳である。

謝辞

・この書簡群の公開にあたっては、継承者の高橋百百子様、竹田長男様の深い御理解によりお許しをいただきました。また、資料が散逸せずに伝存されたことには、佐藤家御家族と春夫研究者の牛山百合子様による文字通り献身的な努力がありました。整理に際して、高橋百百子様、

牛山様御家族、実践女子大学文芸資料研究所の多大な御支援と、新宮市立佐藤春夫記念館の御理解をたまわりました。ここに深い謝意を捧げます。

・年譜の基本情報は、牛山百合子作成「年譜・著作年表」〔定本佐藤春夫全集 別巻1〕二〇〇一・八、臨川書店）に基づきました。

・本稿はJSPS科研費18K00289による研究成果の一部です。